

布衣庵句集





布袋菴集序

山川鍾秀以養物資人也昔人跋履高山

名川而挾雲霞風霜氣因以資長文思矣

今搢紳處士不好遊衆人不得其所以遊

焉惟諧師欲足跡踵於遐陬奧區資其秀

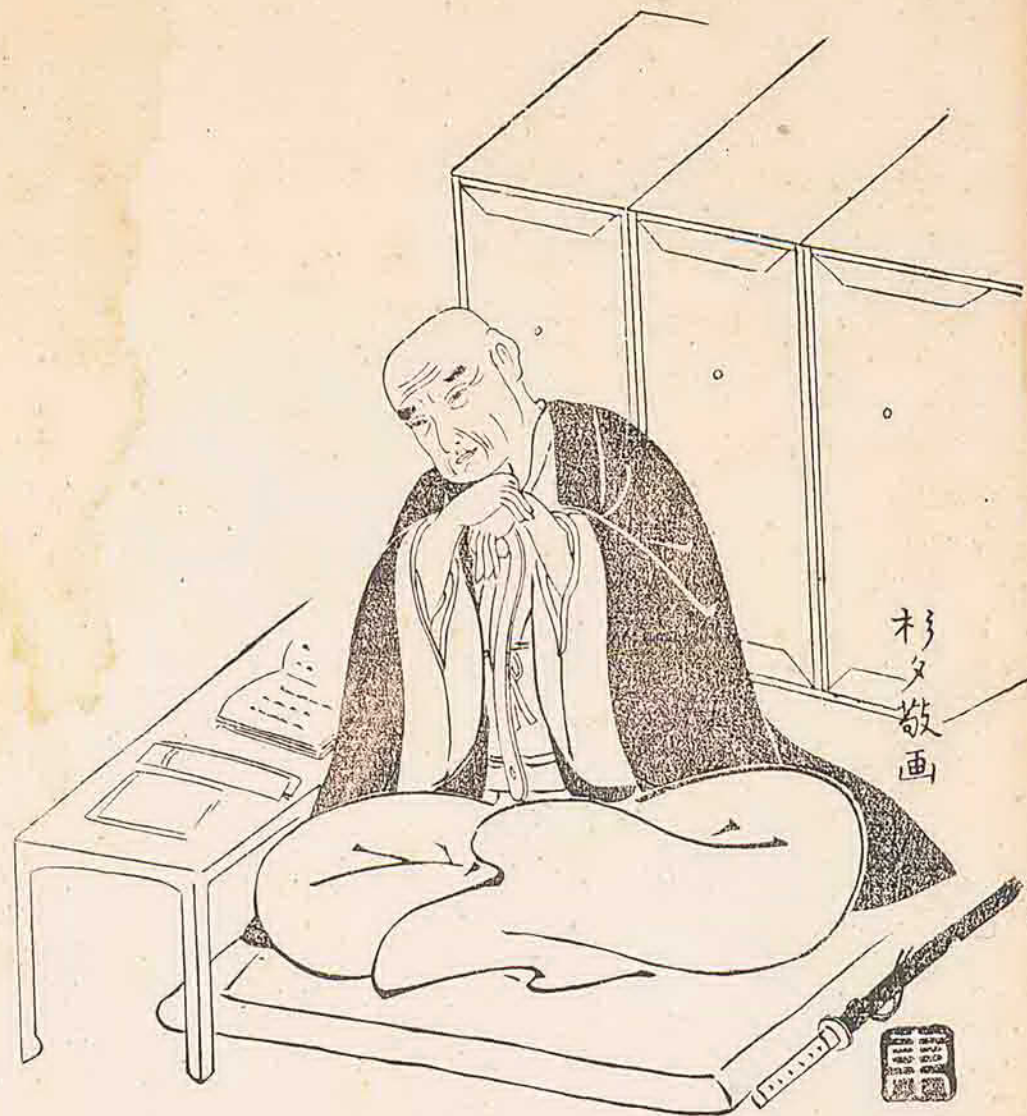
氣以富瞻胸懷耳吾聞鴻巢人橫田柳凡



好山水遊殆遍於天下矣蓋有所資而發
於吟咏是以有雄逸之致前後刊行若而
卷可以觀其遊躅之所窮矣是集也平居
諷詠不涉遊事雖研思之由亦有秀氣資
焉始柳凡受業於林又事柳居而日新渾
化以青藍見推人無間然既歿後社友相

謀謂我業乏其人則不可不遺師承軌範
於後之同好也乃請其子柳也鏤梓以公
于世俗人請余序弗已余不知其歸趣難
乎置辭雖小道必有可觀焉蓋有取而然我
何論哉甲寅正月 關脩齡撰





杉々敬画



布袋菴發句集



目録

3850

日みちをくはるゝあけ青——をねるま
君の代や海も志つゝのち初見
あふもぬまの教や山抄
よひを告ぐりそ——おひり
大服やきのききぬる乃そつむし
食糧や濱乃生砂るれ拾ひ初

鳥を来て来よし 夢の葉を食ふ

伊勢詣とて松を食ふ

水や増かす 祿に 神あり

天地乃鑄物師あり 森羅

万象のりあり 草花のりあり

初あ 草花のりあり 初影

新室より来る

石や 神代乃 あ 刻

人日

七日すて 鶴の 阿つて 石を 築

さのふと 竹 あり 竹や 竹

葉を 採りたてて 来よ 竹の 葉

七種 竹を 採りたてて 来よ 竹の 葉

招 鶴を 招き 来よ 竹の 葉

七 竹や 葉を 採りたてて 来よ 竹の 葉

太 竹や 葉を 採りたてて 来よ 竹の 葉

竹 竹や 葉を 採りたてて 来よ 竹の 葉

米 我 招き 来よ 竹の 葉

其 齡 竹を 採りたてて 来よ 竹の 葉

二 涼 軒 竹を 採りたてて 来よ 竹の 葉

人 日 竹を 採りたてて 来よ 竹の 葉

六もやにふとの葉も揺るゝ

鶯

くろくろあやあゝの船を鳴出ぬ
さるかなをねをふねとつねに
うぐいさやうぐいさみ置は
鶯乃一首やうぐいさ日 和
宗是るあやね乃初言いふ入の
さるやあやうぐいさ引ふね
うぐいさやねの啼りかきうぐい

いさ
あやふさう

此ろやうぐいさのあもね

伊勢古希

長谷亭より

さるやあやのあもね

尾城下

巴蕉此意方著る振ま

うぐいさのあもねをうぐいさのあもね

梅

うぐいさのあもねをうぐいさのあもね
解るあやねうぐいさのあもね

すめうやとく物きねあきねし
腕衣乃珍きねふりえや梅の香
梅の香やねるしあるものには
むささや庭おそ遠き此より
有るもや細目のゆゑくぬね

東都 梅やききとく

わき入 裡より一里梅のよう 解きわ

名吉庵 丁牧子のまにまのね

よのねお梅のいふふ 柳 うる南

春の國 春風よ訪き

ね〜 春風よ訪きや 豊後梅

柳

ふゆのいよきささあき 柳の種
白梅とあきさるる 春風よ訪き
多のふゆに 柳の種 柳の種
風おひさる 柳の種 柳の種
春の風 柳の種 柳の種
春の風 柳の種 柳の種

おひきまなご柳子

雲

沖中を眠らるゝ道一のいふみか
 能く知る中なるあはれもやアアア
 目録のいふにふくむアアア
 ようなふくむにふくむアアア
 海をふくむにふくむアアア
 船をふくむにふくむアアア

讀何

沙樓山

山
子
為
乃
年
職
之
厚
一
重
要

猫乃意

あつたは粟津のあねや猶の意
あつたは今添藤やねえとい
ふと我の珍をお圖や 猶乃意
法と入いおのころとて猶の意
書をとり猶や底乃あわとて

鳳巾

庭に居る者なり

さう内城のもさふらひのうのはる
市中やそり押合ふのうのうの理
風折くあさのうのうのや風中

江都

まあ阿光のうのうのうのうのう
うのうのうのうのうのうのうのう

まは乃

まのうのうのうのうのう

水にうのうのうのうのうのう

蝶

椿

蝶のうのうのうのうのうのう

まのうのうのうのうのうのう

蝶のうのうのうのうのうのう

うのうのうのうのうのうのう

古寺やおのうのうのうのうのう

葉のうのうのうのうのうのう

うのうのうのうのうのうのう

蝶のうのうのうのうのうのう

伊勢山田十文をうのう

杜十のうのうのうのうのう

まのうのうのうのうのうのう

涅槃會

さうさうさうそのさうさう涅槃像
 施業出のさう甲斐なう一徳人像
 ねえん今も子孫をさうさうのさうさう

就月

さうさうさうさうさうさうさう
 さうさうさうさうさうさうさう
 一徳人今も子孫をさうさうのさう
 さうさうさうさうさうさうさう

げんさうさうさうさうさうさう

春雨

さうさうさうさうさうさうさう
 さうさうさうさうさうさうさう
 さうさうさうさうさうさうさう
 さうさうさうさうさうさうさう
 さうさうさうさうさうさうさう
 さうさうさうさうさうさうさう
 さうさうさうさうさうさうさう
 さうさうさうさうさうさうさう

長崎のさうさう
 新島子孫のさう

通しゆくぬ 藤言聞とやまの雨

若子

堇

藤公

菜の花

わつらふやふれ定ぬ 肉とつり
あつやつらつら 砂乃中
こつらやふれつら 都人
和ふふふ 腐や 風乃せり
引つらつら ねとつら
一つらつら 福はすみね
つらつら ねとつら ねとつら 南

福ふや 田ふ 酸ふあるふら
ふらふら 葉は地をぬく
ふらふや 猪首ふふら 空は
菜のふや 里ふ 油をぬく 音
ふらふや 道ふれつら 殊に
菜ふや 門く ねく 神ふ 獅ふ
静ふふ 草ふ 巾に 寺に

紫陽花

大徳者のほりま

新能

韋子也尾落一能芝の布

出代

卷之九

出代や冠を破る編み
てより花月や筆花一より
出代や改を花章の五六日
籍のや逢といやう云ふ可
や好刀や鞍を借忘の物今も
雪問
雪雪
雪雪
雪雪

分所能くはるやうに
初穂を能く動かし
雪解く古縁を
ゆきやうに
温泉の能く
乃ち後乃ち
乃ち雪乃ち

燕

雉子

つゝやうに人乃後ゝ
 正安の所より相燕う
 乙子市にけり

世乃中を流るる居るを尋るる
 きし飛んて居る志を山路が
 かる上多振るる何種子の解
 を我解るる深さなるや種なる
 磯山や浪間くまき子

後子

たゞうきのいそがしぬやむゝ恋
矢刻乃移す

燕 子 過 矣 見 之 橋 乃 上

雲雀
歸鴈

[illegible]

鳥うさぎとてぬきぬき

駒多

鳥多

子雀

駒鳥子報う川うけや風能枝

駒多や翔るうさぎ多きうり

葉かきや人能乃いぬ多きうり

子雀やさきく抱いぬきうり

子雀

猿川

鳥追

松人小唄う傳ふやうり

猿実能人ぬきうり

猿川や物ぬきうり
市中能人おとろ

猿

華

見玉さねて人小酔にま山猿

さね中よりぬきうり

里人のうさぎちいさ

山猿能人なるやうり

さきくわさねてうり

幕多きうり

初為也 疎の歌ハ 宵ヨ 今モモア
獨リモ〜 枯枝 披モ 花々モ

伊勢義上園

飛土老人 聖蹟アリ

あゝハ 稀トモ 夢ヨ ぼ〜き

ニ人 子 浦〜

ちね ちを 砂ヨ 子 松 子 前 繪ハ

いさ 鈴 本 如 之 飯 子

丹 子 乃 工 子 乃 子 乃 子 乃

鶯モ 繪ヨ ぬけ たら 花 花 子 乃

東 巖 山ヨ

獨リハ 管 聞 出ハ ち ち 乃 乃

日暮 一 山ノ

子 乃 子

押 有ハ ち 乃 乃 乃 乃 乃 乃

飛 渾 渾 渾 渾

樺 子 葉 葉 葉 葉

ん〜 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃

鳴 沙 千 代 念 氏

意 翁 乃 乃 乃 乃

以 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃

上 巳

盤

柗

沙 子

曲 水

菴 餅

あゝハ 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃

のり終合の中もむすしな離
柏木子張るやいまりふ所
柳うのきや離れ水祝ひ
かへれそあゝあきと柳のき
鹿さゝや村子源と井戸いし川
ふ入きとふんをケ多うものき
まもちや露母の教さけりし
聖に駒乃りやのれと蓮餅
曲あや橋乃精も流るる

曲水や間いふまをさ川柳
かゝや酒子しり鳥もる
曲水やゝゝゝ島ハ浪成り
一目越ふ年々しんや江戸は
かゝるゝ酒乃かゝや潮子か
館童も海を志すあまは千哉
盤々海はるや志ほい

上野吉井池村

羊舌人の碑が

ろゝや 柳子乃あゝさゝる

さきあきし 野に内なる
さきあきし 野に内なる

桃さきあきし 野に内なる

紀伊熊野

市立温泉あり

あきあきし 野に内なる

苗代 蛙

あきあきし 野に内なる

あきあきし 野に内なる

あきあきし 野に内なる

あきあきし 野に内なる

あきあきし 野に内なる

あきあきし 野に内なる

あきあきし 野に内なる

あきあきし 野に内なる

あきあきし 野に内なる

海棠 蓮翹 躑躅 木尻

山吹

あきあきし 野に内なる

あきあきし 野に内なる

あきあきし 野に内なる

白蓮石と雪と花と少おととい
かきくつや蛇籠とつとあき
遊とくつとつとあきやあき風
地つとくつとつとあきや春乃風

春乃魚

白魚やあきとくつとあき
あきとくつとあきとくつとあき
あきとくつとあきとくつとあき
あきとくつとあきとくつとあき
あきとくつとあきとくつとあき

わの鮎や河を自當のさくさく
遊とくつとあきとくつとあき
あきとくつとあきとくつとあき
あきとくつとあきとくつとあき
あきとくつとあきとくつとあき

蛇塞

炉寒やあきとくつとあき
あきとくつとあきとくつとあき
あきとくつとあきとくつとあき
あきとくつとあきとくつとあき
あきとくつとあきとくつとあき

藤

菅神御忌

初午

所ある梅能ぬさし神の
神垣や砂も多智ふ柳
梅のや通ぬ能ぬ乃屋
葉のや梅法能乃ちや

龍崇

連歌堂

多のや梅能ぬさし
のや細通ぬ民もあ
初午や押繪能ぬさし

とんや藤能鍵さるる

いさ

新無

長あや茶能るるあ

いせ乃西川

芭蕉翁槿塚

長あや調すあな

藤島

要るに

陽を八月うたけ

新堂川

まのやあ

春の——梅のうたけ

十二年乃再會於悅也

朱子學士

萬山万水又逢秋

尾州

何と云ふ

少相子中

石室山王廟一之のを呼ぶ島

伊勢 石 神風 飯 子 天

片木や多勢風乃衆々々々

三保子孫永

子安の如きは三條の如

源光坊の記

し
へ
池
ろ

池乃南子
南子乃南子
乃南子乃南子
乃南子乃南子
乃南子乃南子

芳馨能久

豫
三
車
於
乙
河
東

一 歩より先を歩むの極

回子滿

富子細くお女

市成庵散句集

更心

海鏡も池をめぐるや心うん
ななる事乃終ふものや心うん
長生なる人うん終るや——さるもえ
一口を食さるるかなあまの心
琵琶抱く様みらるやあまの
跡はや心此時乃有る——うん

唐をぬくもや山家乃んうん
嚏——ほあ——あうまうあ

仙醫 魚壺亭に

圓は師に裸をなす——あん

ろふ房もゆき——

白のき——

白も腹——人——や——うん——

灌佛

猶能法をなす——あう——佛生會
灌佛也亦能勝——うん——ほ——あ

ゆびさひも漏乃村に佛生會
飯り能住居——うん——や——あ——
猶のぬるも蓋合——うん——あ——
卵のこもあゆき——福や佛生會

卵目白

あうまう

延まハと朝とおり人そと佛
も寺にあらは——目ちや——あ——

杜多 川骨

うん月の船——うん——あ——

いさやふもさあやう—— 枝あり
 田を遊〜いさやふもさあやう〜
 ちあれ〜いさやふもさあやう〜
 浪乃むさあやう〜いさやふもさあやう〜
 川骨みあやう〜いさやふもさあやう〜
 かう〜いさやふもさあやう〜いさやふもさあやう〜

三河國八橋あり

あやふもさあやう〜いさやふもさあやう〜

あやふもさあやう〜

う〜いさやふもさあやう〜いさやふもさあやう〜

牡丹 苗葉

深とぬもさあやう〜いさやふもさあやう〜
 吐とぬもさあやう〜いさやふもさあやう〜
 七重ハ重入りとぬもさあやう〜いさやふもさあやう〜
 白〜いさやふもさあやう〜いさやふもさあやう〜
 深〜いさやふもさあやう〜いさやふもさあやう〜
 さ〜いさやふもさあやう〜いさやふもさあやう〜
 苗葉みあやう〜いさやふもさあやう〜

新屋智

境へはあつたりいふはあつたり

知はれ
十町松路より

十町松路より
あつたりいふはあつたり

さうさう

あつたりいふはあつたり
あつたりいふはあつたり
あつたりいふはあつたり
あつたりいふはあつたり
あつたりいふはあつたり
あつたりいふはあつたり
あつたりいふはあつたり
あつたりいふはあつたり
あつたりいふはあつたり
あつたりいふはあつたり

郭公

あつたりいふはあつたり
あつたりいふはあつたり
あつたりいふはあつたり
あつたりいふはあつたり
あつたりいふはあつたり
あつたりいふはあつたり
あつたりいふはあつたり
あつたりいふはあつたり
あつたりいふはあつたり
あつたりいふはあつたり

物ほる友より待てくあてうす

起し小鍵裂ききくほてきし

ゆふ人麻をきく

不天ちち待目色也郭

二千余日をたてその庵に
あかき庵にきく

ちのつきと老あてあうそ持

果物

鉄炮のきくそ訓くわてき

是利果換

あていほく庵をくや杜鶴

あていほく庵をくや杜鶴

あていほく庵をくや杜鶴

あていほく庵をくや杜鶴

あていほく庵をくや杜鶴

あていほく庵をくや杜鶴

あていほく庵をくや杜鶴

あていほく庵をくや杜鶴

あていほく庵をくや杜鶴

加サ古々々

野原ーやあーるーるーあかんこる
 月系みおるくくーあ古鳥
 閑古るるやまうれ秋乃暮
 意のーるーるーあかんこる
 人あれーるーるーあかんこる
 物あれーるーるーあかんこる
 あまうれあまうれあまうれ
 あまうれあまうれあまうれ

花子

静るるるるあかんこる
 二十のさーるーあかんこる
 白あまうれあまうれあまうれ

おらる

おらるるるるあかんこる
 おらるるるるあかんこる
 おらるるるるあかんこる
 おらるるるるあかんこる

あまうれ

あまうれ

あまうれ

夏山

雲が雲屋にたやわらや
 やわらやをあらふはる雲
 月をあらふはる雲をあらふ
 雨乃らるはる雲をあらふ
 風の雲をあらふはる雲を
 きれはる雲をあらふはる雲
 雲の七ゆき
 妙はる雲をあらふ
 雲は火の雲をあらふはる雲
 仙臺止る雲をあらふ

雲が雲屋にたやわらや
 やわらやをあらふはる雲
 月をあらふはる雲をあらふ
 雨乃らるはる雲をあらふ
 風の雲をあらふはる雲を
 きれはる雲をあらふはる雲
 雲の七ゆき
 妙はる雲をあらふ
 雲は火の雲をあらふはる雲
 仙臺止る雲をあらふ

とさうさうやにわく風はきく

桐生西 職屋

錦織お秋はきく

老鷹 祢豆いり

きくやきくきくきくきくきく

きくきくきくきくきくきく

きくきくきくきくきくきく

信妙 望屋

後脚

きくきくきくきくきくきく 湖水

きく

目きくきくきくきくきくきく

きくきくきくきくきくきく

きくきくきくきくきくきく

きくきくきくきくきくきく

きくきくきくきくきくきく

きくきくきくきくきくきく

きくきくきくきくきくきく

善之寺

出井

夏刈や田々やあな

解子 園扇

東坡云々 扇の傳ふまじ 考へ候
何れも扇のまじ 折るれんやうや
其のやうに 涼しうめを 碎
それゝやうに

このかゝ扇のちをせう

松の風扇

松風も夏いも夏に扇のうね
西風も扇の底れあつたうね
弦振るは風おぬゝうね

あつたも扇の蓋乃う

越後柿崎の旅泊

柿崎や

扇

浮きや舟のう

定規や櫓のうねを遊てさ
藤やゝね水のなまな
評や風おぬゝうねを阿

夏水鳥

息

流さしとおのの新ひふ輩果能
以時や居る能居ぬつるも
朝書み枕りし水鏡の事
其志くくくは自初のお露
青波や柳の結る草乃中
掬つてい乃流る鳥れ自お哉
あを飲み火をのい新や鶴の毎
鴨もいやこゝ咽もおさるる
と若み群るも透間さるる

よ〜切や柳〜是て帝己〜を

誠信の國

親志〜はうて

るるみあのを〜おのや親を〜

新は雷別

るるをま〜わつ柳〜やな露

武蔵

小信義招きて

鴨のあは信れ〜居み形るや

大津巨洲の鳴乃

水樓〜

鳴るるあのを〜らんちり樓れ上

仰見初船より

一ッ子や押合ふ舟の浮橋島

長崎姥の懐より

鴨乃子や姥の懐より人出つり

長崎村山氏子

水極より

琴より子ふきもあや菜の花

川宿より

川宿や姥の懐より人出つり

川宿や姥の懐より人出つり

海より子ふきもあや菜の花

市中乃子や姥の懐より人出つり

諸草花

海より子ふきもあや菜の花

龍燈子臨海より人出つり

同舎繪乃丹々佐々屋並み

吹雪より子ふきもあや菜の花

接子や姥の懐より人出つり

風車や姥の懐より人出つり

くさくさ 師幸は路や車百合

奥みまのちのち

夏まのちのちのちのちのちのち

くさくさ 師幸は路や車百合

夏まのちのちのちのちのちのち

くさくさ 師幸は路や車百合

夏まのちのちのちのちのちのち

くさくさ 師幸は路や車百合

夏まのちのちのちのちのちのち

くさくさ 師幸は路や車百合

夏まのちのちのちのちのちのち

くさくさ 師幸は路や車百合

夏まのちのちのちのちのちのち

くさくさ 師幸は路や車百合

夏まのちのちのちのちのちのち

くさくさ 師幸は路や車百合

夏まのちのちのちのちのちのち

くさくさ 師幸は路や車百合

泣きそふのやうな心やうな人
盡くろふ朝露や一木正し
昔ありえりやうのうな人

旅

かきくあふりなれ

昔水や毒日思ふれううう

瑞午

山風を都てりめたりううう
平月多能水極ハ音一軒阿やめ
君う代や餅の菓をううう

白くもたれうう九まや若葉ノ葉

あやめうううううううううう

孫をたれうううううううう

君う代乃うううう風や残れうう

伊香保

岩たううう

昔月定うううううううううう

町屋

みううのねをううううううう

葉かうううううううううう

東三条通柳の三坊
を江原何く猿河より

九重の猿河を越えたり一帯

旱雨

枝も根も分りきりや五月の
吉御は八尾流りりさつさ
者さささわさめ水や旱月雨
ささささやささささささ
ささささささささささ
枝も根も分りきりや五月の

五月雨

五月雨の中も新しや松乃陰

改題

一日乃雨上り果てたり
雨止も我内りたり

改題

お明りえささささ
いさささささささ
いさささささささ

遊遊々々人を静める所なる處
むきし物も遊々火もある處の那
入るをてふもさうやうな處

尾中境

訪りて

何ひとも言ふ如く愈もけり

蝸牛

角も物さうやうなれ——
這まらうと云ふ物もやうな
さうなれと云ふのほろ

尺とつゝるが智恵はけり

老おや倉

大隆寺より

留まら戸もさうなれ

田植

まき田

子てやや恋をぬきみかたに
病うもさうなれと云ふや田植
あまたなりと云ふや田植
一人てさうなれと云ふや田植
あてやや恋をぬきみかたに

摘新く福より来るを待てる相

氷室 富士宿

と〜〜乃曇る〜と〜と氷室哉
多ゆり〜と熱いものより氷室来
あ〜あ〜と雲ゆく〜い〜るる
と〜と〜と〜と〜と氷室 う南
豆蔵夫人り〜あ〜と〜と氷室
若菜の鹿子ゆ〜と〜と氷室
新法師の國〜と〜と富士宿

雲は降るやあ〜と〜と不二福

赤松山王祭り

赤水のいやを口吉にすつと先

龍戸

あ〜と〜と里や〜と〜と獨冠

京祇園祭

白あけ神輿はひや神う〜と

神事會や〜と〜と造る物

吾先寺

神事會

月鉾や影を田毎に流るる水

か茂乃夢多

祭にやとあゝれりてわゝ車

いふ井

若竹や靡くくろね電もく
わゝるるやとあゝれりて
いふ井やとあゝれりて
あゝれりて
あゝれりて
あゝれりて

白雨

夕ちや村に実をい依れい
いふやとあゝれりて
白雨やとあゝれりて
あゝれりて
あゝれりて
あゝれりて

清水

松の葉乃針もくくくく
あゝれりて
あゝれりて
あゝれりて

臨み物なりとて志を川に
取寄けり中なる清水の
邊と云ふ顔又合ふ志を
うらぬのそりやあく一柳

芳徳の國

應え候なり

みの榴皮りまゝは世に傳ふ哉

蝶

暑き日此に仰るありとて此聲
傳ふやぬる涙さきかき

とつとやとすれと物とて

暑

言能くもとて此中此日若
隙ありとてあやとて此
所とてとてやとて息つと暑哉
暑き日やいととて此世に
多しとて風流なりとてあつと

形は世に生るなり

不異り―持て入るをぬきとて

湯殿山

雲端より老き洞子湯殿うき

古用子

妙房より月もあゝ古用子
幾人より夢をそねりや古用子

此東村
又珠寺あり

出子や智恵さゆゝ新納の

雲峯

塔いづゝ玉衣より雲の

雲名峰 其日くの山ありあま

巖きゝ海より湯に雲の峯

裾よりそねり松原や雲乃峯

ゆるぎありそねり雲の峯

を雲乃人よりやゝみね

新と隣り江都へ

かかろの麦水々名新をわ

おり流しなる宮より飛や雲乃峯

越後出る時新峯

此浦よりや修治より雲の峯

涼風 薰風

起り山南ふ山や夕々々
 夕々々後々々涼う露
 涼うや膚を過る川能音
 夕々々々々々々々々々々
 物此の位は高々々々々
 涼風乃々々々々々々々々
 物涼う成す々々々々々
 涼々々々々々々々々々々

越後千曲川

夕々々々々々々々々々々

加勢乃人々々々々々

厚川も細流を催す

夕々々々々々々々々々々

誠乃意深

社もあう

あ々々々々々々々々々々

檀目の文は久松

夕々々々々々々々々々々

松高きさう

尾の白尾と橋立

島渡り廻り涼

二書

伊豆熱海一登橋より

景も目の新しきや

松島より

涼き水邊より

日之山より

秋風乃草や瑠璃花より

志見水邊より

涼き水邊より

上野河田伽葉山より

夏空より

浪華より

涼き水邊より

一条河原より

涼き水邊より

夏後

涼き水邊より

涼き水邊より

瀧出た夢も扇や流板川

毛崎留別

柳さくく館より出され茅庵うれ

夏草 紫陽花

夏草りや節々をきくぬき静

なり葉やあきくさくさく時

紫陽花の目めく葉 藍の泡

下総坂河原相馬氏より

いさくはらけの穂やあきく

飛騨の穂をきく
昇進をきく

位山より穂をきく 保冬る夢を

伊賀れ相馬の
義出庵より

聞よりきくみの山 庵やあきく

信濃訪ねる
雅好さきくきく

いさくはらけの穂やあきく

江都龍節庵の手に

ねよせぬくくく庵にきく

あきくく阿蒙院にきく
ねよせぬくく

又之可也石火矢矢入は時

宇治書院山系御寺より

唐韻を一夜に聞や松の蟬

瀨州白峯崇徳院御廟

松のやと虫の蟬の市にあり

天よりあり

此後永く歳調や蟬の聲

唐のあり

さきさきとあるをいふと一ひ松

夏月

短衣や入るる水も夏の月

とらとら飯食庭や夏の月

急をいふ所の面影あり

うめくと橋を越えりなつて

檀の浦より

短衣や芦間みまみみあふ

次唐より

次唐より葉の揺るるをいふ

園防岩國錦半橋より

中絶ぬ常子橋ありて雲の峰

龍天謡山より

沛山より雷乃新しや雲の峰

リ神の弦風とて雷あり

藤子為やあつてあゝあゝ

卯月ナニとあつて

芭蕉庵あり

曾ねとてあゝあゝなりてあゝ

片流の草と
製よりとて

若返る古道細く片流に里

多岐遊船

肥前松葉酒催し

船より仲子歌向や船ありて

長崎南条寺より

菊ありやちねるありてあゝ

強者之の寺

親相より細路

雲より船にけりありてあゝ

皇太后の御所より

あゝあゝ影や雲よりあゝ

あま常待あり

年大寺より

わさるゝあふにききやあ大寺

二つふ浦前終のわさる

二つふ月お廣出 涼し松の上

治智恩院新造お奉より

寺涼し 軒より日傘お所定

をほより浦後のわさる

涼しきや浦後近江も一ト坐敷

國分山初恒庵お旧跡より

たのすれく推もききや下涼し

讃岐金毘羅山より

牙ほより二つ月涼し 象頭山

きね福山より

園におききよりきき

園中より操伸ききや 簞

安曇岩島お神より

きき園乃圓廊涼し 波涼し

箱お福園海の中より

きききき海も神代お造道

多古碑
村山氏子所

古為り後如捨い也三河葉 祐

ねまきわ他

ねまきわ能行を傳う 祐安

多古碑

多古碑 入野 祐安の面

布衣庵散句集

立秋

秋は来るも水も来りて秋の秋
木も葉も赤も黄も色もあま
夕顔花後を泣くや今朝乃秋
火もくも出やうもあはれ秋
晴る屋も晴やけさる秋あま
浮きもの生を改めしは乃あま